

氏名	鄭 理耀
ヨミガナ	チョン リョ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第276号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ローベルト・シューマンとピアノ・テクニク —運指練習から多面的な音楽活動へ—

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	土田 英三郎
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	大角 欣矢
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	片山 千佳子
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	福中 冬子
(副査)	国立音楽大学	元教授		藤本 一子

(論文内容の要旨)

本論文は、ローベルト・シューマン (Robert Schumann, 1810-1856) のピアノ・テクニクに関する研究である。シューマンは1830年4月、当時一世を風靡したニコロ・パガニーニ (Niccolò Paganini, 1782-1840) の演奏を聴き、大いに魅了された。シューマンが音楽家になることを決意したのは、そのすぐ後のことであり、自身もピアノで超絶技巧の新境地を開こうと、テクニクの修練に勤しむようになる。その成果は、シューマンの3つの技巧的作品、すなわち《パガニーニのカプリースによるエチュード》Op. 3 (1832年出版)、《パガニーニのカプリースによる6つのコンツェルト・エチュード》Op. 10 (1835年出版)、そしてシューマン最大の技巧的難曲《トッカータ》Op. 7 (1834年出版) に集約されることとなる。シューマンがこれらの作品に集中的に従事するのは1833年までであることから、それまでをシューマンがピアノ・テクニクに最も傾注していた時期とすることができる。本論文は、主に1833年までのシューマンのピアノ・テクニクの挑戦に焦点を当て、その取り組みについて、一次資料から詳細を明らかにすることを目的とする。

第1章では、シューマンがピアノを習い始める1817年から、ピアニストになることを放棄し執筆活動を本格的に始める前の1833年までに受けた、音楽教育と音楽体験について概観した。

第2章では、シューマンのピアノ・テクニクの試みを解き明かす鍵を握る、2つの未完成プロジェクト、すなわち「練習日誌Uebungstagebuch」と「ピアノ教則本Clavierschule」について考察した。ここでは、シューマンが1833年までに書き残したピアノ練習、及びピアノ奏法に関わる全ての楽譜資料を検証対象とした。「練習日誌」はその名の通り、ピアノの練習を目的とした音型を書き留めたものであるが、ここに、シューマンの技巧的作品との関連音型があることが判明した。これは、シューマンの作品の一部が、自身の運指練習から生まれていることを意味する。「練習日誌」に記された全音型の分析を通して、シューマンの特異な練習方法が明らかとなっただけでなく、彼が重点的に取り組んでいたテクニクが浮き彫りとなった。また、シューマンが日々の練習から独自のメソッドを打ち立てようとする過程を具体的に追うことができた。そうして、「ピアノ教則本」の構想が生まれる。その制作年を推定し、楽譜資料に散在する断片的スケッチを精査した結果、シューマン教則本の全容が浮かび上がった。さらに、それをシューマンと直接的、又は間接的に関連のあった11の教則本と比較すると、彼の独自性がはっきりと見えた。「ピアノ教則本」でありながら作曲の練習にも適応される音型が多く含まれ、「練習日誌」と同様に、運指練習と作曲行為が常に隣り合わせにあったことが示されている。

第3章では、未完成プロジェクトとほぼ同時期に創作された、上記の3つの技巧的作品を扱った。前章の考察から、各作品に未完成プロジェクトとの関連が明確に見られたので、ここでは検証結果に基づいて3つ

の技巧的作品の成立過程を再考した。《パガニーニ・エチュード》Op. 3 及びOp. 10では、これまでの制作年の推定を大きく揺るがす新しい事実が発見された。また、2つの稿が存在する《トッカータ》Op. 7では、初期稿から印刷稿への改作に、シューマン自身のピアノ・テクニクの取り組みが大きく関係していることが明らかとなった。受容史の調査からは、これらの作品がピアノ学習者やピアニスト、そして作曲家に、多大な影響を与えていたことが確認された。このシューマンの成功の背景には、未完成プロジェクトである「練習日誌」と「ピアノ教則本」があり、これこそが全ての根幹をなしていることを忘れてはならない。本論文ではこれらのプロジェクトに着目したことで、各作品の真の成立過程を明らかにすることが可能となったと考える。

第4章では、シューマンの1833年までのピアノ・テクニクの挑戦が、その後の音楽活動に及ぼした影響について考察した。作曲行為と同様に、執筆行為にもそれまでの運指練習が実に密接に関係していることが明らかとなった。

一連の検証から、シューマンの1833年以降の活発な音楽活動の原点は、彼の運指練習にその根源の一部があることが考えられる。シューマンは、《パガニーニ・エチュード》Op. 3 及びOp. 10を、「多面的」な成長を望むピアニストのために創り始めたが、結果的には、彼自身がそれを具現化することになったと言えよう。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、ローベルト・シューマンのピアノ・テクニクへの取り組みについて、一次史料をもとに実証的に明らかにしようとしたものである。主に対象となる時期は彼がこの問題に最も集中していた1833年まで、関連作品としてはパガニーニのカプリースによる二つの《エチュード》作品3と10、それに《トッカータ》作品7が取り上げられている。

第1章ではシューマンが受けた音楽教育と音楽体験が確認され、特に1830年の圧倒的なパガニーニ体験がヴィルトゥオーソ的なものへの開眼を促した点で大きな意味をもったことが強調される。第2章では二つの未完プロジェクト「練習日誌」と「ピアノ教則本」その他の関連スケッチの成立過程と内容が詳細に検証される。シューマンの運指練習と作曲が隣り合わせになっていて、彼の作品の一部は自身の運指練習から生まれていること、特に重音奏法が重視されたこと、あえて弾きにくい独特な運指法の実験も行われていたことが確認された。「教則本」についてはこれが初めての本格的な研究であり、その全体像が解明された。さらに関連する同時代の11の教則本と比較することで、シューマンの独自性と、時代の先端をゆく構想であったことが明らかとなった。第3章では同時期の作品3曲(集)の成立史と受容史が扱われる。作品3と10に関しては、これまでの成立年の推定を大きく揺るがす事実が発見された。さらに教則本の構想がすでに出版準備のできていた作品10の代わりに作品3とその序文に流れ込んだことがつきとめられ、作品10に属するスケッチが新たに同定され、この曲集も練習日誌と作品3の序文と関係していることが確認された。ブラームスが所蔵していたパガニーニの原曲の印刷譜がシューマンが所蔵し使用していたものであること、しかもこれがドイツ初版の印刷用原稿であったことも判明した。シューマン最大の難曲でありピアノ・テクニクへの取り組みの集大成である作品7についても、その成立史で初期稿の年代が修正され、練習日誌などとの関係が新たに証明された。第4章では、以上のピアノ・テクニクに関する取り組みの成果と彼の理想像が、職業ピアニストになることを断念したあとの作曲や著述、ピアノ教育などの活動と密接に絡み合っていること、他人の音楽活動にも少なからぬ影響を及ぼしていることが論じられ、手導器の使用、指の故障の問題についても一次史料から再考察されている。

このように、これまで明確に論じられたことのないシューマンのピアノ・テクニクの問題について、徹底的に一次史料から調査・考察した、すぐれて実証的な研究であり、学術論文として高い評価にあたいする。とりわけ、まだそれと認知されていなかった史料をいくつか同定したこと、主要史料の年代や詳細を修正ないし明らかにし、三つの技巧的作品の成立過程に関する新説を提示したこと、そして次第に難度を高めてゆく演奏技法への取り組みと習得の過程がこれら3作品に結実してゆくさまを明示したことは、目立った具体的成果であり、マッコークルの『シューマン作品目録』や《シューマン新全集》に新たな情報を提供し、それらの記述の修正を迫るものである。史料研究から得られた運指など奏法に関する知見は、実際に当時の楽

器を弾いてみることで確認されており、現代楽器では効果的でない運指の意味するところも考察されている。本研究はシューマンの創作・批評活動に対しても新しい視点を提供するばかりではなく、19世紀ドイツのピアノ音楽史の構築にも部分的に寄与するものである。

一方、問題点としては、まず第一に、史料のドキュメンテーションが重要な部分を占めるこの研究において、史料記述の手順や方法にかなり改善の余地が残ること。つまり論文執筆の技術的な面でまだ経験不足が目立つ。既存のすぐれた校訂報告などを参考に、もっとわかりやすく提示する工夫が必要である。同時に、論理の展開に説得力をもたせるためには、良い意味での論文的レトリックがもっと必要であるとの指摘もあった。また、読解が難しい日記などの私文書の解釈に、短絡的な物語化の傾向がないかという懸念も指摘された。さらに、判明した事実の意味づけに関して、もっと筆者の思いきった解釈を展開してもよかったのではないか。例えばあえて弾きにくい指使いを行ったのはなぜか、メカニカルなもの、ヴィルトゥオジティへの熱狂的な姿勢が、従来の「詩的」なイデーというロマン主義的なシューマン観をどのように修正ないし再考させるのか、シューマンにとってエチュードとは結局何だったのか。欲を言えば、奏法の議論に加えて作品への音楽批評的な切り込みがもっと欲しいところではある。

とはいえ、現在のシューマン研究に貴重な一石を投じる論文であることは間違いなく、国際的なレベルの研究であると言える。よって合格とする。なお、本論文はデュッセルドルフのシューマン研究所をはじめ、多くの組織や個人の協力のもとで執筆されたものであることを付言しておく。